

GALAXY ANGEL ~
Fortune Lovers ~

神余 観珪

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

皇国の英雄タクト・マイヤーズは、エオニアのクーデターを鎮圧後、エルシオールと共に辺境宙域の探索任務に就いていた。

特に異変もなく任務を終えて帰還している途中、シヴァ皇女から通信が入る。曰く、謎の強奪船団が現れた、と。

タクトたちは強奪船団に気を付けながらも航行していると、宇宙クジラから通信が入って……。

新たなエンジェルも加入し、戦いの幕は上がる――

☆ ☆ ☆

- ・この作品はゲームをプレイされた方前提に書いています。
- ・プレイしていなくても問題はないですが、分かり難いところがあります。

目次

Moonlit Lovers

†.	†.	†.
03	02	01
新しいあの子	天使との再会	祖からの手紙
40	20	1

Moonlit Lovers

†. 01 祖からの手紙

トランスバール皇国歴412年。

元皇子エオニアは、皇国に対してクーデターを起こした。

彼が率いる謎の無人艦隊は、またたく間にトランスバール本星を制圧。

宇宙は、混乱に包まれた。

クーデター発生当初、このオレ……タクト・マイヤーズは、辺境宙域の艦隊司令官をしていた。

中央で起きてる大騒ぎも、こんな遠く離れた場所にまで飛び火することはないだろう……。

辺境を漂いながら、オレは……その程度にしか考えていなかった。

……彼女たちに出会うまでは。

「タクトさん……」

「タクト……」

「タクトさん……」

「タクト……」

「タクトさん……」

「白き月」を守護するムーンエンジェル隊。

ロストテクノロジーの結晶である「紋章機」を乗りこなす、5人の少女。

彼女たちは突然やってきた。

ミルフィーユ・桜葉^{さくらば}。

料理が得意で、誰とでも分けへだてなく接する、やさしい女の子。そして、ものずい

い幸運と凶運の持ち主。

蘭花^{ランファ}・フランボワーズ。

勝ち気で、負けず嫌い。運動神経バツグンで、格闘技が得意な女の子。

ミント・ブラマンシュ。

ブラマンシュ財閥の一人娘で、上品な物腰のお嬢さま。テレパシーで人の心を読むことができる。

フォルテ・シュトーレン。

銃器のプロフェッショナルで、エンジェル隊のまとめ役。アネゴ肌の頼れる相手だ。

そして、ヴァニラ・H^{アッシュ}。

控え目で献身的。あまり感情を表に出さないけど、他人を思いやる心は誰にも負けない。
い。

彼女たちは、皇族の生き残りであるシヴァ皇子を守って本星を脱出してきたんだ。

オレの恩師であるルフト准将と、“白き月”防衛艦隊の旗艦エルシオールとともに。

オレはエンジェル隊の司令官となり、シヴァ皇子を味方のいるところまで送り届ける任務を引き受けることになった。

孤立無援の旅が始まった。

エルシオールは何度となく、エオニア軍の襲撃を受けた。そのたびに、オレとエンジェル隊は力を合わせて敵を打ち破り、先に進んだ。

危険な旅を続けるうちに、オレたちは少しずつお互いのことを知り、信頼関係を築いていった。

そして、ついに目的地のローム星系にたどり着き、オレたちは味方と合流できたんだ。

シヴァ皇子を迎える舞踏会が開かれることになり、無事に任務を果たしたオレたちも招待された。

……だけど、その楽しい時間はエオニア軍の攻撃によって断ち切られた。

圧倒的な力を振るう“黒き月”の出現。オレたちは絶体絶命の危機に陥った。

でも、オレたちは決してあきらめなかった。

紋章機に隠されていた、未知の力。その力を引き出したエンジェル隊は、敵を次々となぎ倒していった。

そして、エルシオールも、クロノ・ブレイク・キャノンを搭載して、“黒き月”に対抗できる力を得た。

何よりも、みんなの心がひとつになっていた。エルシオールの乗組員、ルフト准将、シヴァ皇子、“白き月”のシャトヤーンさま……。みんなが力を合わせて、エオニアと“黒き月”に立ち向かった。

皇国の未来を守るために。

……はげしい戦いの末、オレたちはエオニアを倒し、“黒き月”を破壊した。

皇国に平和が戻った。

そして……。

——彼女の声が聞こえた気がしたんだ。

☆☆☆☆

「おい……。おい、タクト。……。タクト！……。起きろ、タクト——っ!!」

「……………っ!？」

急な大声で目が覚める。今のはレスターか？

「やつと起きたか。そろそろ真面目にブリッジに顔を出せ。そろそろトランスバール本星と直接通信がとれる宙域に入るんだからな」

「了解。わかったよ。じゃあ顔を洗ってからそつちに向かうから、ルフト先生に報告するための資料と、必要なデータをオレの端末の方に転送しておいてくれ」

「わかった。できるだけ早く来いよ」

「はいはい」

そうやって通信を切る。

レスターはオレの母親かつて。まあ、そういうところも含めて頼りにしてるんだけど。

それにしても、エンジェル隊のみんな、どうしてるかな。

顔を洗い、軽く歯を磨きつつ、かつての戦友に思いを馳せる。彼女たちと出会ってから、半年の月日が経った。エオニア戦役が終了後、オレはエルシオールの司令官を続けるとともに、辺境宙域の中でも未開宙域の探索任務に就いていた。対して、エンジェル隊のみんなは、本来の任務である“白き月”の護衛をするとともに、トランスバールの復興を支援しているらしい。

それに、ルフト准将が宰相として敏腕をふるっている。復興も目に見えて進んでいる

はずだ。

だけど……

「まさか、シヴァさまが女性だったなんてな、全然気がつかなかったよ」

そう言いながらブリッジに入る。

「仕方がなからう。私とて、皆に知られるわけにはいかなかったのだ」

「げっ!? つて、シヴァ陛下下!」

「久しいな、マイヤーズ。しかし、『げっ』とはご挨拶だな」

「す、すみません! それと、お久しぶりです」

噂をすれば影、か。シヴァさまからの通信があつたから、レスターがオレを呼んだみたいだ。それにしても、どうしてシヴァさまからの通信だつて言ってくれなかったのか。レスターにうらみがましい視線を向けてみる。レスターはニヒルに笑っただけだった。イケメン爆発しろし。

「マイヤーズ、そうクールダラスを責めるな。口止めをしたのは私だぞ」

「し、失礼しました! つと、それより、シヴァ陛下。何か用があつたのでは?」

そう言つて話を変える。これ以上続けると、レスターやアルモあたりに後で弄られるのは目に見えている。しかし、シヴァ陛下も鋭すぎやしないか? たつたあれだけの視線移動だけでオレの心情を把握するとか、これが宮廷内での腹の探りありの結果のなの

か。いや、邪推はやめておこう。バレた時が怖い。デイスプレイ越しとはいえ、それだけのことを察するシヴァさまだし、いつバレるか分かったものじゃない。

それにしても、シヴァ陛下直々に通信とか、どんな用件なんだろう。そう思つてデイスプレイに目を向けると、それは大層不服そうなシヴァ陛下がおられましたとき。

「そうか、戦友ともに連絡するのも、理由が必要だということなのか。まったく、嘆かわしいことだな、マイヤーズ。私はそなたの声を聞きたいと思つたのだが、それでは理由にならぬか？ 私のかわいい願ひは叶わないようだぞ、ルフトよ」

「はっはっは、陛下、タクトにそのようなことを求めても仕方がないでしょう。朋友ともならわかつておいでではないですかな」

「それもそうだな。……して、マイヤーズよ。ここからが本題なのだが」

ルフト先生もいたのか、全然気がつかなかつた。というか、シヴァさまも人が悪すぎですよ。用があるなら最初からそう言つてくださいよ。こちらは冷や汗かきまくりですからね！ まあ言わないけど。

「はい、なんででしょうか？」

顔色ひとつ、声色ひとつ変えずに言えたことを、我がことながら褒めたい。エルシオールブリッジについて、謁見しているわけではないし、プライベート回線だから、そこまでかしまる必要はないのだろうけども、ルフト先生の目の前で粗相をするわけに

はいかないしな。少し気を引き締めようか。真面目な話みたいだし。

「そろそろエンジェル隊の皆から知らせが届くと思うが、最近、辺境宙域で商業船を襲撃している集団がある。詳細は追って通達することになるだろうが、既に皇国軍の駐留基地にも被害が出てきている。現在のマイヤーズがいる宙域とは正反対故に、まだ何もないだろうが、用心して本星まで戻ってきてくれ」

「はっ！ 了解しました！ エンジェル隊と連絡が取れ次第、速度と警戒レベルを上げて、本星へと帰還します」

「よろしく、頼んだぞ」

そう言つて通信が切れる。毎度思うけど、シヴァさまと対面すると、嫌でも襟を正しくなる。これが皇族の求心力つてヤツなのかね。

それはそうと、いつの間にか本星と直接通信できる範囲に入ってたんだな。シヴァさまから連絡があつたつてことはそういうことだろう。通信のついでにルフト准将の端末に、こちらの辺境宙域の探索結果と航海の内容。それから消費資源と物資の調達するための申請書。その他、いろいろな書類データを転送しておいた。そちらの返答も次の通信でもらえるだろうし、後はエンジェル隊からの連絡待ちかな。

「マイヤーズ司令、クジラルームのクロミエさんから連絡が入っています。なんでも宇宙クジラが話したいことがあるそうです」

思考の波に身を任せていると、アルモから声がかかった。レスターたちも先程のことはオレが焦っている姿が見れたからか、蒸し返すことをしないで業務に戻っていたみたいだ。

「そうか、じゃあクジラルームにちよつと出かけてくるよ。エンジェル隊からの連絡があつたら、放送で呼んでくれ」

「ああ、わかった。今回の通信でお前の役目は一段落ついたし、クジラルームに行くついでに散歩でもしてこい。そのころにはエンジェル隊からの連絡も来るだろう」

アルモにお願いしたのにレスターから返事がもらえらるとは。これはアルモは『以心伝心ですね!』とか言つて喜んでそうだ。アルモももうちよつとレスターに直接的になれば、仲も進展すると思うんだけどね。

「わかった。それじゃ行つてくる」

そう言つてブリッジを出る。

クジラルームに行くまでの間に、通信で言われたことを整理しておく。おそらくこれは何かの始まりだ。オレの中に眠る何かがそう告げている。

皇国軍の基地や商業船を襲う強奪船団。エオニア軍の生き残りか、それとも新たな勢力なのか。いずれにせよ情報はいまだ少ない。整理するほどのことでもなかったか。

そんなことを考えながらクジラルームを訪れる。

「タクトさん、わざわざすみません」

「いや、いいんだ。それで、宇宙クジラは、なんと言っているんだ？」

「はい、すぐ来るそうです」

「え？ ……来るって……」

すぐ来る？ 首をひねっていると、プールの沖の方から波の音が近づいてくるのが分かった。煌々と照らす太陽と波の音が夏の浜辺を幻視させて気持ちがいいんだけど、あれはビッグウェーブ過ぎるな……

「って……うわっ!! いきなり何も見えなくなったぞ！」

波の音と共に聴こえる轟音。艦が傾いたのかと思うほどの地揺れと共に視界を覆う黒。テラテラと光る黒と暗黒に満ちた黒。ああ。分かつてはいたさ。ただ現実を直視したくなかっただけさ。これも宇宙クジラが目の前を遮っているおかげで影に入っただけのことだろう。急に暗くなったから、目がついてこれなかったんだろうな。何も見えない。そろそろ視界を返してもらえないだろうか。このままじゃ落ち着かないからさ。

——キョオン

そんなことを考えていたら、宇宙クジラが察してくれたのか、プールに戻ってくれた。いつも思うが、宇宙クジラは気がきくイイ奴である。

「それで、宇宙クジラの話ってというのは、なんなんだい？」

「はい、実は……」

ちよつと首をかしげ不可解そうな顔をするクロミエ。

クロミエがこういう風になるときはなんらかの前兆だったりするんだよな。ましてや宇宙クジラは人間が捉えることのできないものまで捕捉しているようだし。クロミエは宇宙クジラとある程度感覚をリンクしているからなのか、そういつた第六感シックスセンス的なものが鋭いんだよね。エンジェル隊を相手にしていた時もアドバイスは為になつたし、たまにおふぎけで冗談を言ったりするけど、時と場合はわきまえてるから、そういった意味でも信頼しているし。

いつもクロミエの言には気に掛けるようにしてるんだけどね。今回は一体なにを言われるのか。

「……宇宙クジラが、誰かの声のようなものを聞いたそうなんです」

その言葉を聞いた瞬間、何かがフラッシュバックするかのような感覚を覚える。

誰か……彼女の声が……

「途切れ途切れでよくわからないが、どこか懐かしい声だった。とのことです」

そうだ、宇宙クジラは人の心の動きを感じ取れるんだ。もしかしたらオレが聞いたあの声も、彼女の声についても分かるかもしれない。

「えっ?」

「どうした、クロミエ?」

「ああ、いえ。宇宙クジラによりますと、タクトさんの心当たりとは別らしい、です。加えて、通常の人間の思念波とは少し違うみたいで、おそらく、このエルシオールの機械でも、なんらかの情報が捉えることができるはずだ、と」

「どういうことなんだろう。オレの聴こえた声じゃないことに、落胆したわけではない。ただエルシオールで捉えることができるとなると、何らかの通信みたいなものなのか。それとも、得体の知れない、未知のなにかなのか。」

「どの方向から聞こえてきたか、とかもわかるかい?」

「……すみません、宇宙クジラにもわからないみたいです」

「そこで一息いれ、また宇宙クジラの声に耳を傾けるクロミエ。寄り添う小宇宙クジラもなにやら思案顔をしているようにみえる。」

「最初にかすかに聞こえていたものが、すこしずつ大きくなってきている、そうなんです
が……」

「ふむ……」

—— つえ?

聞こえるか聞こえないか、それくらいわずかな音量ではあったが、確かにクロミエ

の口から戸惑いの音が漏れた。

「クロミエ、どうしたんだ急に？」

「今、宇宙クジラがまた……かろうじて理解できたものの中に、確かに『EDEN』^{エデン}という言葉あった、と……」

「EDEN……だって？ それって……」

「はい、およそ600年前、時空震によって崩壊したとされる、先文明の名前です」

そうだ。オレの記憶は間違ってたなかつた。

EDEN。今からおおよそ600年前まで栄えていた文明。かつて全銀河に巨大なネットワークを築いていたと伝えられる先文明で、その科学力・技術力は今の比ではないくらい高く、今からしてみれば夢物語語なくらいだったとされる。また、紋章機やエルシオールにも使われているロストテクノロジーを生んだ。

EDENという名の文明が崩壊して、その混乱の中から、今のトランスバール皇国ができあがったんだ。

「でも、どうしてその声の中にEDENという語が入っていたんだい？」

「さあ、そこまでは……でも、何かとても切迫した情動を感じる、と宇宙クジラが言っています」

「その声の主は、とてもせつぱ詰まってるということ……？ うーん、わからん」

「だけど、EDENって言葉が出てくるということは、ロストテクノロジーに関連した何らかの情報、という公算が高い。まだ情報が少なく推論の域を出ないけど、それでも宇宙クジラが何かを感じ取っていることは確か。それに、その何かが近付いてきている、とも。これは、もしかしたら先手を取られたらまずいかもしれない。何か分かったら、本星に連絡をいれておいた方がいいかもしれないな。」

「よし、とりあえずエルシオールのデータを探ってみよう。何かわかるかもしれない」「はい、よろしくおねがいます」

「クロミエの方も、何かわかったら連絡を入れてくれ。宇宙クジラもよろしくな」

——キユオーン

クロミエの肯定した返事と共に宇宙クジラも返事を返してくれた。クロミエたちの声に背を向け、クジラルームを出る。

これから忙しくなりそうだな。

オレのつぶやきは誰にも聞こえなかっただろう。

ブリッジに戻り、艦員^{クルー}たちに今の話を告げる。最初は疑ってかかっていた人もいたが、今は真面目に話を聞いてくれている。

「宇宙クジラが聞いた声……か。本当にそんなものがこの艦でも捉えられるっていうの

か？」

「宇宙クジラはそういつていたぞ。それに、もし本当にEDENの……ロストテクノロジーに関する情報だったら、放っておくわけにもいかないだろう？」

「確かに、俺たちの任務は、まだ見つかっていないロストテクノロジーの探索にあるわけだが……」

「そういうこと。それに……」

「ん？ それに……？」

みんなには、なんでもない。とごまかしたが、レスターは納得がいつていないようだ。——その声のことが、妙に気にかかるんだ。何か予感がするということか……

レスターにだけ聞こえるようにつぶやく。そのレスターもオレにだけ聞こえるように、お前のカンはよく当たるからな、とつぶやいた。

レスターもオレと一緒に長いかからか、こちらの意図を十二分に酌んでくれる。とりあえずオレとレスターだけは、みんなよりも警戒しておこう。何か分かったら連絡しよう。シヴァさまにはまだ黙っておくか。そういった意図を共有する。

「とりあえず、ここ数日の観測データと通信記録を洗い直してみよう。アルモ。ココ」

「了解しました！」

「それでは、データの再チェックにかかります」

「すまないな、みんな。よろしく頼む」

オレの声を皮切りに、アルモ以下通信班とココ以下のリーダー解析班のスタッフは解析に入る。小一時間もすれば確認は終わるだろうし、オレとレスターはこれからの針路と、報告如何によつての判断をどうするか相談を始めるのだった。

「……マイヤーズ司令、報告します」

ココからの声がかかる。アルモたちもほぼ同時に作業を終えたようだ。レスターとは最悪の状況を想定して、付近にいる皇国軍が援軍として到着するまでの時間とそこから導きだされる予測針路を計算していたところだった。

「つと、なにか見つかったかい？」

「いえ、現状とくにかわったところは見つかりませんでした」

「そうか、アルモの方はどうだ？」

アルモにはレスターが訊いてくれる。アルモもオレよりもレスターに声をかけられて嬉しいだろうが、今から真面目な報告をするんだ。緩んだ口元を引き締めてくれよ？

「こちらでも変わりありません……あつ……!!」

「どうした？」

急にアルモの顔が真面目に引き締まる。レスターに報告しているにも関わらずだ。

おかげで、レスターも少々身を乗り出し気味だし。これでレスターが女の子の機微に疎くなかったら、アルモも救われるだろうに。

「なに、これ……？　こんな波長の通信なんて……」

そう言われオレも少々気を引き締める。別に緩んでいたわけではないが、真面目に思考を巡らせられるように、リラックスするとともに、何が来ても冷静な指示が出せるように身構えておく。

「なにか手がかりが見つかったのか？」

「はい、たぶん……ノイズに紛れて、はつきりとはわかりませんが……」

「いいから、再生してみろ」

レスターの言葉にアルモ再生しようと指を動かすが、あるデータを見て動きが止まった。

「いえ、そのままではおそらく何も聞こえないと思います。超高周波数帯なので、再生しても人間の耳では聞き取れないと思います」

そう言って変換を試みるアルモ。本当に見つかるとはな……。というレスターの言も宙に描き消え。

「可聴周波数帯に変換しました。再生します」

そして押される再生ボタン。スクリーンから聞こえてくる声は、どこか聞き覚えが

あつて……

「……EDEN……コエテ……イソゲ……ロキ……ヨ……ユウゲン……サダメラレ……
ラヨ……イソゲ……ニオオワ……」

そしてザザツという音と共にフェードアウトしていき、アルモの以上です、という声と共に再生が終了された。

オレはどこか懐かしさすら感じる声の主に意識を飛ばしていた。いつ聴いたのか。どこで話したのか。どんな場面だったのか……

「ところどころしか聞き取れないんじや、何がなんだかわからんな。だが……」

「ああ、確かにEDENと言っていたね」

レスターの声に意識を戻す。今はそれを考えている場面じゃない。こちらの謎のメッセージの方が重要だ。

「この通信が、EDEN文明のロストテクノロジーに関係している可能性は高そうですね」

「ああ、調べてみる価値はありそうだ」

「アルモ。この声、もつとよく聞き取れるようにできないかな？」

「やっではみまずけど……こういうのは慣れていなくて」

「それでも構わない。ダメもとでいいから、よろしく頼むよ。ココ、君はこのメッセージ

の発信源をトレースしてくれないか？」

「はい、わかりました」

さーて、どういった結果が出るかな……。

少し楽しみでもあり、少し恐怖もある。何か触れてはいけないもの触れてしまうかのような感覚。でもどうしても触りたくなるような感覚。その両方が相反し、しかし両立してオレの中に存在する。それゆえに自然と笑みを浮かべてしまうのだった。

†. 02 天使との再会

結局あれからルフト將軍には連絡をいれようつてことで、通信を呼びだしているんだけど、未だ応答はなし。すでに直接通信ができる宙域に入っているはずだから、通信が繋がらないつてことは機器の故障かあるいは……

「あ……っ!？」

ココが声をあげると共に、レッドアラートが鳴り響く。ブリツジは瞬時に緊迫した空気に包まれた。ココとアルモの指が空間投影されたキーボードの上を踊る。

「本艦の正面に多数の艦影が出現！ 距離、60.000です！」

「識別信号、確認できません！」

矢継ぎ早に告げられる報告を脳で順番に処理していく。ココとアルモは優秀だ。たとえ多少出遅れても、十分に取り返してくれるはず。

それにしても距離が近い。ここまで接近されるまで気がつかなかったつてことは、耐レーダーのステルス装甲か、ミラーージュ装甲を積んでるはず。こちらの戦力がエルシオールと護衛のバームル級巡洋艦2隻だけじゃあ心もとないな。

識別信号を発信していないとなると、民間船や商業船、果ては皇国軍である可能性は

かなり低い。最悪を想定して動くとなると、一応戦闘配備した方が無難か。

「総員、第二種戦闘配備。アルモ、先方に通信は繋がるかい？」

「……だめです、応答ありません！」

「仕方がない、か。レスター、全艦に通信を繋いでくれ」

「わかった。……いいぞ、タクト」

「了解。……総員に通達。本艦正面に所属不明の艦隊が出現。各員、第二種戦闘配備についてくれ。この所属不明艦だが、おそらく最近皇国を荒らしている強奪船団だと思われる。第二種戦闘配備についてもらってはいるが、戦闘になる可能性が高い。そのつもりでいてくれ。非戦闘員は念のため自室待機だ。各種装甲を展開する。隔壁を閉じることになるかもしれないから気をつけてくれ。以上だ」

食堂はこの時間なら仕込中かな。ごめんな、おぼちゃんたち。でも命には変えられないからさ。

それにしても、まだ交戦域に達していない。ここで転進するのも手ではあるか。戦力の点から見ると、明らかに火力不足。レーダーを見る限り、こちらよりも数が多いことも明らかではあるし、不利なのは変わりないが、だけど。それでも、見逃すわけにはいかないよな。わずかな可能性ではあるが、民間船つてこともあるわけだし。

「ココ、所属不明艦隊を望遠でモニターに映せるかい？」

「……最大望遠でとらえました！　メインモニターに映します」

「……っ!？」

モニターに艦影が映されると、みんながみんな驚愕をあらわにした。

それはそうだ。なにせ、映っていた艦隊は、エオニアが使っていた黒い無人艦隊だったのだから。

オレたちで黒き月を破壊した以上、生産プラントはすでに失っているはずだから、無人艦隊も増えるはずはない。それにエオニアも旗艦とともに沈んだはずだ。指揮官がないはずなのに、どうして無人艦隊が出現したのか。

各員、考えは違おうだろうけど、だいたいこんなことを考えているはずだ。

レスターがどうする、といった視線をこちらに向けている。無論、徹底抗戦さ。敵艦を全滅させるまで、だ。

「っ!？」 所属不明艦のうち、1隻が急速に接近中。高エネルギー反応を確認、攻撃してきます！」

「ちっ、出遅れたか。エネルギーシールドを展開しろ！　攻撃を避け！」

オレの代わりにレスターが指示を出してくれる。大局的な差配はオレがすることが多い代わりに、レスターには逐一行動指示を出してもらうことが多い。戦略と戦術の違い、というのもあるけど、役割分担というのかな。そういった面で、オレはレスターを

尊敬している。今の場面だって、回避を選択することも可能だったのに、レスターは迷うことなく防御を選択した。その思い切りのよさと選択を決定しても間違わない判断の正確性。レスターは本当にすごいと思う。

それにしても、衝撃に備えてイスにつかまってたけど、揺れもしない。攻撃はどうなったんだろう。

「攻撃が来ない？ どういうことだ。ココ、状況を報告しろ！」

「はいっ……所属不明艦が何者かの攻撃によって破壊されました！」

そういうことか。でも、この宙域に他の艦影はないはず。先程、所属不明艦隊が出現した折に、全方位確認しているはずだ。もし何かあれば、ココから報告がはいるはず。つてことは、こちらにも迷彩を施してあるのか。

ただ幸運なのは、今のところ味方だということ。識別信号はどうなっている。

「本艦の8時の方向、距離およそ6.000からの攻撃と思われます」

「識別信号、確認……紋章機です！」

紋章機か……単独でクロノ・ドライヴしてきたということだろうか。それならドライヴ・アウト反応が出るはずだけど、どういうことだろう。いや、今はそのことを考えているときじゃない。

識別信号が紋章機なら、白き月所属だろう。天使たち^{エンジェル隊}が来てくれたなら、ひとりでも

この状況を覆せる。長距離からの狙撃ってことだから、ミルフィーかフォルテが来てくれたんだろう。

「その紋章機に通信をつないでくれ。エンジェル隊と久しぶりに会うのが戦場つてのはちよつとアレだけど、この状況をどうにかしたい」

「了解。紋章機にコンタクトを取ります……繋がりました。メインモニターに映します」

そして映し出されたのは、ミルフィーでもフォルテでもなく。

黒曜石を思わせる黒い髪に夜空を想像させる黒い瞳。清楚な見た目に反せず、きちんとした制服の着こなし。ロングのスカートが、彼女の性格を物語っているようだった。

要するに知らない女性だった。

「こちら、ムーンエンジェル隊所属、シャープシューター。搭乗者の烏丸からすまちとせ少尉です。新入隊員として、エルシオールの護衛を任されることになり、お迎えに来たところ、所属不明艦と交戦しているとの情報が入り、攻撃しました。エルシオールに被害は出ていませんか？」

新入隊員に誰もが口を開けて驚いている。紋章機が新しく見つかったのもそうだけど、パイロットがすぐに見つかったのもすごいなあ。まあそんなことよりも。

烏丸少尉に続き、ミントとヴァニラがドライヴ・アウトしたみたいだ。これで形勢は

逆転したかな。それじゃ、挨拶を済ませてパットとやつつけちゃいますか。アルモがミントとヴァニアにも通信をつないでくれたみたいだし、高速リンク指揮システムを起動させてもらおうかな。

「こちらはエルシオール、司令官のタクト・マイヤーズだ。君のおかげで助かったよ。こちらは無事、被害も出ていない。ミントとヴァニアも。長旅で疲れているところをいきなりの戦闘で申し訳ないけど、援護を頼むよ」

「こちらは問題ありませんわ。わたくし 私たちのことよりも、タクトさんの方が指揮の取り方を忘れている、なんとことになってはいませんか？」

「これは手厳しいな、ミント。高速リンク指揮システムを起動するのは久しぶりだけど、まだまだ衰えてはいないはずだよ」

「それはようございませすわ」

「タクトさん。高速リンク指揮システムの更新があります。データを送信しますので、アップデートを済ませた後に紋章機の登録を行ってください」

「アップデート？ 新バージョンが作られたのか。とりあえず了解した、すぐに済ませるよ」

そう言うってからアルモに視線を向ける。アルモも領いてすぐに全ての工程を終わらせてくれた。これで、紋章機はエルシオールの指揮下に入ったわけだ。さて、やりませ

か。

「アルモ、作戦図をモニターに映してくれ」

「了解」

メインモニターに目を向ける。エルシオールの位置と敵艦の位置、そして紋章機の位置とデブリの確認を済ませる。格下が相手とはいえ、オレはみんなの命を預かっている。慢心や油断、ましてや手を抜くなんてことは許されない。常に全力で敵を倒すことに意識を向ける。

みんなが指示を待っている。それじゃあ作戦開始といこうか。

「まずトリックマスターは前方のデブリを6時の方向から迂回後、エルシオールの前方に展開。敵艦が散開したところを、端から叩いてくれ。シャープシューターはそのまま前進。敵右舷から殲滅してくれ。ハーベスターはシャープシューターの援護を。烏丸少尉は初陣だろうし、緊張と疲労は戦闘経験がない者にとつては命取りになるかもしれない。先輩らしく、守ってあげてくれ。エルシオールはこのまま微速後退。戦闘宙域を縦に伸ばす。挟撃する形に持っていくつもりだが、逆に紋章機が挟撃されないように注意してくれ。以上だ。何か質問はあるかい？」

「問題ありませんわ」

「……大丈夫です」

「マイヤーズ司令、どうかよろしくおねがいたします」

エンジェル隊のみんなの顔を見て、適度な緊張に包まれてるいい状態だな、と思った。これなら下手なミスさえなければ勝てる。

「よし、みんな行くよ。エンジェル隊、出撃！」

「了解ですわ」

「……了解」

「了解！」

☆ ☆ ☆

戦闘はオレの予想通りに動いている。

烏丸少尉が初陣ながらなかなかの活躍をしているのが大きい。敵右翼を外側から攻撃して、早々に中心部に集めたのが一番の働きだろう。

ミントはオレの指示を忠実にこなしてくれる。少々難しいことでも平気で成し遂げちゃうのは、前回の大战を戦い抜いたミントの技量なら当然だったかな。

ヴァニラは烏丸少尉の護衛をこなしつつも、敵艦を翻弄。攻撃して数を減らしている。指揮官のいないAIじゃヴァニラに攻撃をかすらせることもできないみたいだ。

「ミント、その敵を撃破したら、敵中央に向かって必殺技を使ってくれ。烏丸少尉は、敵後曲に攻撃を開始。一隻たりとも逃がさないようにしてくれ。ヴァニラは敵前衛を掠めるように、最高速度でもって右翼から左翼に向かって横切ってくれ。敵がヴァニラを追撃しようとしたところを、ミントのフライヤーで落とす！」

「了解しましたわ」

「シャープシューター了解！」

「了解しました」

これでチェックメイトだ。ミントのフライヤーで広範囲を攻撃して落とす。烏丸少尉とヴァニラで敵を集めてもらえれば一網打尽だ。

「シャープシューター、攻撃を開始します」

烏丸少尉の攻撃を皮切りに、ヴァニラが敵前を横切り始める。AIの設定は近くの敵を倒せとなっているようで、ヴァニラを追いかけ始める。烏丸少尉は速度が遅い重巡洋艦クラスを狙撃し、的確に敵を誘導していた。ミントはテンションを維持しつつ、ゆっくりと敵との距離を縮める。勝利は目前だ。

「ハーベスター被弾、損傷は軽微です」

さすがにあの数の敵の囷をしていたら、流れ弾かマグレ弾くらいあたるかな。でも回避に

次いで防御も堅いハーベスターだ。エネルギーシールドを展開していただろうし、損傷が少ないのも本当だろう。……心配だけどね。

「ご覧あそばせ、光の舞を……フライヤードダンス！」

そうこうしている間に、敵を上手く密集させたヴァニラと烏丸少尉。その瞬間を見逃さず、ミントがフライヤーを飛ばす。もちろんミントに見落とすなんてあるわけもなく。あつという間に敵艦隊を殲滅してみせた。

戦闘結果を見ると、ミントが撃破8で圧倒的だ。だが、ヴァニラも烏丸少尉も見事な敵艦誘導だった。二人がいなければ、ミントの撃破8という結果もないだろう。

「よし、戦闘は終了だ。三人ともご苦労さま。エルシオールに帰艦してくれ」

「久しぶりのエルシオールですわね」

「……ただいま帰ります」

「シャープシューター、エルシオールに着艦します」

さて、それじゃあミントとヴァニラを迎えに行くとともに、烏丸少尉に会ってこようかな。

「というわけで、レスター、後は任せたよ」

「何が、というわけで、だ。まあ了解。さっさと行ってこい」

レスターも分かってくれてなによりだ。それじゃ、格納庫に向かおうかな。

☆☆☆

「……エンジェル隊、帰艦しました」

「ふたりともお疲れさま。ミントもヴァニラも久しぶりだね」

「お久しぶりですわ。タクトさんも久しぶりの戦闘でカンが鈍っているのではないかと思いますけれど、杞憂でしたわね」

「お久しぶりです。タクトさんもお変わりなく」

ミントとヴァニラはオレが格納庫に着くのとほぼ同時に紋章機から降りてきたようだ。さて、期待の新人さんはどこかな、と。

「ちとせさんでしたら、まだ紋章機のそばにいらっしやいますわ。先程クレータ班長が挨拶に向かわれましたから」

「クレータ班長のところか。これから紋章機の整備でお世話になるもんな。さっきの戦闘でもオレの指揮が悪かったからヴァニラが被弾したけど、大丈夫だったかい？」

「……問題ありません。クレータ班長には修理のおねがいをしておきました」

「そっか、すまなかつたね」

「いえ。タクトさんの指揮は悪くありませんでした。被弾も掠った程度ですので、大丈夫

夫です」

それからもミントとヴァニラと話していると、あつという間に時が過ぎる。二人とも聴き上手だし、久しぶりの再会ということもあって、会話が弾む。大した内容ではないけれど、こういうった穏やかな時間が一番いいよな。戦闘後の殺伐とした空気を変えるのにちょうどいい。

そうこうしているうちに、烏丸少尉が紋章機から離れてこちらに来た。

「ムーンエンジェル隊所属、烏丸ちとせです。あこがれの方の指揮下で戦える荣誉にあずかり、光栄に思います」

「いや、こちらこそ助かったよ。初陣だったみたいだけれど、大丈夫だったかい？」

「恐れ入ります。なんとか先輩方の足手まといにならずにすみました」

「足手まといだなんて。それに初陣にしては上出来さ。最初の長射程射撃も見事だったよ」

「ありがとうございます」

そうそう、あの距離から攻撃をピンポイントで駆動部に当てて、誘爆を引き起こし、一撃で沈める。並大抵の腕でできることじゃない。それに敵方とは遠かったとはいえ、初陣で敵を目前としている状態で普段の実力を引き出すことができた点も評価できる。まだ新米だから、といって甘く見ていると、他のエンジェル隊の子たちも、あつという

間に抜かれちゃうかもね。

だけど――

「ちよつと固いかな。公式の場じゃないんだし、通信でも、ログを取っているわけでもないんだ。オレのこともタクトでいいよ」

「……は？」

「敬称づけで呼ばれるのや、大げさな渾名で呼ばれるのがどうも苦手なんだ。伝説だとか英雄だとかね。そのかわりって言うてはなんだけど、君のこともちとせつて呼んでいいかな？」

「ええーっ!？」

いや、嫌ならいいんだけどね。と付け加えたが、聞こえていたかどうか。まあ烏丸少尉のことだし、真面目だから、上官をファーストネームで呼ぶのは、とか憧れのエンジェル隊の指揮官を……とか考えているんだろうな。

ふとミントと目が合うと、苦笑しつつ頷かれた。やっぱり烏丸少尉は真面目だ。きつと学校とかの通知書には「真面目すぎる」とか「柔軟性に欠ける」とか書かれたタイプなんだろうな。まあ、そこらへんはエンジェル隊にいれば自然と身につくだろうし、心配はしてないんだけどね。

「ちとせさん。タクトさんはこういう方ですし、エンジェル隊にいる間はずっとこうで

すわよ?」

「それがタクトさんのやり方ですので……」

「そうですか……恐れ多い気がするのですが」

「堅苦しいのは好きじゃないんだ。それで、どうかかな?」

「はい、よろしくおねがいます、タ、タタ……タ、タク」

うーん、ここまで緊張されると逆に申し訳ないというか。そんなにかしこまらなくて
もいいのに。

「ちとせさん、深呼吸ですわ」

「は、はいっ!」

「では、吸ってー吐いてー吐いてー吐いて——吐いてー吐いてー」

「ケホッ! ケホッ!」

「コラコラ、ミント。新人で遊ばないの」

「いいではありませんか。こうして緊張をほぐすことが目的ですから」

分かっているさ。ただ体裁としてね、言っておかないといけないことつてのはあるんだ
よ、うん。初対面だからね、ちよつとはいいとほしいところを見せておかないとね。

「ケホッ! コホッ! ……でも、ありがとうございます、ミント先輩。おかげで緊張が
ほぐれました」

ミントからほらみろ、といった視線が。痛いよ、突き刺さってるよ。

「それではちとせさん。落ち着いたのなら、あとは思い切って」

「は、はい！ タ、タ……タクトさん……！」

「うん、ようやく落ち着いたね。それじゃあ改めて。よろしくね、ちとせ」

「あ……。はい、よろしくおねがいます！」

——ポーン

そこで館内放送のチャイムが鳴る。長いこと格納庫にいたせいか、レスターあたりがしびれを切らしたんだろうな。

「マイヤーズ司令、およびエンジェル隊は至急ブリッジへお集まりください」
やっぱりアルモからの放送だった。

格納庫の反対側にいるクレータ班長たちが笑ってるのが見える。仕方がない、ブリッジに戻るか。

「それじゃブリッジに行こうか。ちとせはオレたちに着いてきてね」

「はいー！」

そして格納庫を後にする。さてさてみんなとの話が終わった後はお小言が待ってるんだろうな。ああレスターのところに行きたくないなあ。

☆☆☆

「改めまして着任のごあいさつを申しあげます。烏丸ちとせ少尉です。これからよろしくおねがいます」

ブリッジに着いてから、レスターとアルモ、ココの紹介をして、それからちとせの自己紹介をしている。

その後もサクサク話は進み、ルフト將軍からの新たな作戦行動の命令書なんてものも渡された。以前シヴァさまが言っていた、エンジェル隊からの連絡つてのがこれだろう。あの通信の場にはルフト先生もいたんだから、言ってくればよかったのに。まあ、天使たちから渡した方がオレが喜ぶって考えなら当たってるんだけどね。

その新しい任務つてのは、第三方面軍管理下のレナ星系周辺の所属不明艦……先程戦った無人艦のことだろうが、この集団の調査と拠点の探索を命じられた。この作戦にザッハ星系で任務に就いていた残りの天使たちも合流するらしい。今から楽しみだ。

そして、紋章機がエルシオールに搭載されるに当たって、今まで護衛の任に就いていたバーメル級巡洋艦は本星に帰還するらしい。

レスターとちとせの問答を聞く横で命令書に目を通してあるが、ちとせの私見だとエルシオール単艦の方がフットワークが軽くなるから、という理由もあるらしい。

レスターが完璧と称するほどの人材がエンジェル隊に加わったことだし、これから大変な任務が始まるけれど、嫌なことばかりではないのかもなあ。

「ミント、ちとせを部屋の方に案内してあげてくれ。ヴァニラも疲れているだろうし、三人とも、これから休憩に入っているよ。合流地点までクロノ・ドライブしていくから、道中も比較的安全だしね。じゃあ今日のところは解散、お疲れさま」

そう言って三人を送り出す。実際のところ本星からこの艦まではそうとう距離がある。ザツハ星系系からも同様だ。その長旅を終えた直後に戦闘。今は気分が戦闘から抜けてないから高揚して気にならないとは思うけど、心身ともに疲れているはずだ。ここで無理はさせられないし、テンションに影響を与えてもマズイからね。ゆっくりと休んで欲しいな。

「それで、タクト。エンジェル隊を外して、何か言うことでもあるのか?」

「あはは、やっぱりレスターにはわかつちやうよな。後で司令官室に来てくれ。ココ、クロノ・ドライブの準備に入ってくれ。目標はポイントY M f 288だ」

「ここからだ、途中のポイントW S n 375で一度ドライブ・アウトすることになります。よろしいですか?」

「それでいいよ。それじゃ、よろしく」

「了解。ではクロノ・ドライブに入ります」

「ではアルモ。通信障害の原因究明と復旧を急いでくれ。人を使ってくれてもいい」「了解しました」

レスターもアルモに指示を出し終えたし、オレもブリッジでやることは全て終わった。じゃあレスター。司令官室に行こうか。

「よし、じゃあ俺とタクトはいったんブリッジを離れる。何かあったら通信を入れる」
レスターが声をかけ終わるのを見て、ブリッジから離れる。司令官室はすぐ近くにあり、問題が起きてても対応はすぐにできるだろう。

「それで、タクト。話つてのはなんだ？」

「それはね——」

司令官室のイスに腰を下ろし、レスターも応接用のソファに腰を下ろす。ちよつと長くなる話というはお互い理解していることだ。

それで、命令書の内容だが、佐官以上しか目を通してはいけないことになっていた。オレは艦長職に就いているから大佐。レスターも前のクォーターで少佐に昇進している。もちろんオレは昇進を蹴った。

「二つ目はちとせとシャープシューターに関して。新型紋章機は長距離狙撃用にカスタマイズされていて、有効射程はミントの三番機よりもはるかに長い。戦闘指揮をとる上で機体スペックは重要な情報だから頭に入れておいてくれ」

「ああ」

もちろん欠点もある。総合火力が支援機のハーベスターとほぼ変わらない点。装甲が薄い点。などだ。詳しい資料はレスターの端末にも送ったから、チェックしてくれるだろう。火力不足でも先手を打てるのは大きいことくらいレスターも分かっているだろうしね。

「それからちとせ本人に関しての報告書だ」

『センパール士官学校 宇宙科』と題され、その下には学生番号だろうか、TRFA 04SP2589”とある。

センパール士官学校は卒業後は出世コース間違いなしの超エリート学校だ。あの優秀さは伊達ではないってことだね。成績表、内申書、担当教官からのレポートとあるが、評価はSとAのオンパレード。情報関連教科で特に優秀な成績を出しているようだ。実技も故郷の古流武術の弓道をたしなんでいるせいかな、集中力が高く、長射程射撃は群を抜いているらしい。もちろん、シャープシューターとの相性も考えれば納得がいく。そして、真面目すぎる性格から若干柔軟性に欠ける、と評されてもいる。考えることほどの教官も同じらしい。逆を言えば、欠点欄にこれ以外書くことがなかったということでもある。本当に優秀な人材だ。

「そして二つ目。どうやら新規のエンジェル隊員はちとせだけじゃないらしい。次のド

ライヴ・アウトのポイントWS n375で合流するみたいだ。時間もこちらがドライブ・アウトする時間とほぼ変わらない時間にそのエンジェルも到着するらしい。この航路はその新規天使が考案したみたいで、双方との時間と距離、それから今後の予定航路を考えての案だそう。これはかなり頭が切れるみたいだな。そして、一番重要な点は――」

——この新規隊員が元黒き月の管理者であるノアと名乗っていること。そして、自らで紋章機を組み上げたということだ。

「——っ!？」

これは他の船員に言える内容じゃないだろう。ノアと名乗った新人もルフト先生とシヴァさま、シャトヤーンさまにしか話してないらしいし、こちらも上部で情報を止めておいて欲しいとあった。機を見て公開するのだろうけど、どうなることやら。

「ノア、か。ちとせだけなら問題はなかっただろうが、これは波乱の予感がするな。タクト、がんばれよ」

「わかってる」

そういつて二人で口を閉ざす。お互い考えることが多い役職だし、戦闘面や物資、運用面も考えていかねばならない。それ以上にエンジェル隊のことも。

結局、アルモから呼び出しがかかるまで、沈黙が破られることはなかった。

†. 03 新しいあの子

「ノアさまと呼びなさい。ノアさまと！ まったく、これだから下つ端連中は」

初対面でこれか。格納庫から連れてきて、いきなりこれとは。以前に会ったノアとはずいぶん印象が違うな。それに左手が触手じゃないし。エンジェル隊に所属していることになっていてみたいけど、制服も着ていないし、これが本来のノアってことなのかな。

ブリッジにいる面々……レスターにアルモやココ、エンジェル隊のみんなも凍りついてるし、ここはオレが話しかけるしかないかな。

「それで、詳しい自己紹介はしてもらえないのかな？」

「……そうね、あんたたちにも、私のことを知る権利があるわよね」

そう言っただけで話始める。傍若無人な態度は変わらないけど、多少は歩み寄ってくれる姿勢を感じられた。立場上警戒を緩めるわけにはいかないし、まだ見極めるには至っていないけど、少しは気を許してもいいのかもしれないな。

「私の名はノア。一応エンジェル隊所属ってことになっているわ。紋章機は私のお手製、ノーザンライツイヴ。スペックは後で詳しく話すとして、今は名前だけの紹介ね。

あ、後、黒き月の管理者をやっているわ」

沈黙。

「は？」

誰かが呟いた。オレじゃないと思いたい。先日、ルフト先生から秘匿事項として伝えられた情報を全てばらしちゃった。これに対する驚きはオレとレスターだけだと思いが、びつくりだ。

みんなは自分で紋章機を作ったことにたいする驚きなんだろうと思う。それのおかげで、最後の黒き月の管理者云々つてのは、みんなに聞こえていないだろう。つていうか、そうであつて欲しい。

「じゃあ、タクト。あんたの部屋に案内してちょうだい」

「え？ どうして？」

さつきから驚きの連続でオレとノアしか話をしていないが、大丈夫なのだろうか。

それよりも、オレのことを呼び捨てにしたのは、まあいいとしても、なんでオレの部屋、というか司令官室に案内をしなければならぬのか。一応データでオレが司令官ということとは知っているだろうし、そこからオレの私室が司令官室であることは考え付くだろう。仮にも、オレたちとの合流ポイントを計算して考えられる人物であるなら、だ。「そんなの決まつてるじゃない。私はタクトの部屋で寝泊まりするからよ」

「それはっ!？」

意外なことに、その言葉に反応したのはミントだったが、そんなことを気にしている暇はない。なぜオレの部屋に寝泊まりする必要があるのか。

「詳しくはそこで説明するから、ほら、早く移動するわよ」

「……はあ、分かったよ。じゃあみんな、とりあえず司令官室に来てくれ。レスターはアルモとココといっしょにブリッジで待機。よろしくね」

「ああ……」

なんとか言葉を返したレスター。歩きだしたノアを追いかけるオレ。ふたりとも色んな意味で疲れてるのが目に見えているだろうな。ははっ、オレの肩、煤けているんじゃないか。これから、どうなるんだろうか。

……はあ、どうにでもなれ。

「タクトは大丈夫なのか……」

レスターの声はオレには届かなかった。

☆☆☆

「ふうん。タクト、あんた、いいイスに座ってるじゃない」

司令官室に着いたオレたち。部屋に入るやいなや、執務用のイスに腰掛けたノア。ミントとヴァニラ、ちとせは入口でポカンとしたままだった。彼女たちを促して、ソファに座らせる。

「まあね。それより、詳しい説明、してくれるかな」

「分かったわよ。それじゃ、まずは私が作った紋章機からかしら」

そこから語られるノアの紋章機のこと。

ノーザンライツイヴ。形式番号GA—00X。

もともとノアの紋章機はH・A・L・O・システムだけ他のエンジェルたちと同じ物を使っているらしい。だが、そのH・A・L・O・システムも試作型だった。だから形式番号が00Xで“experiment”を冠しているらしい。その試作型H・A・L・O・システムを黒き月が破壊される瞬間に持ち出していた。というのも、もともと人間の力で黒き月を破られるとは思っていなかったらしく、防壁を破壊された時に、インターフェースを起動して、自分と入れ替えたのかなんとか。そして、黒き月が破壊されそうになると、あらかじめ探しておいたH・A・L・O・システムを持ち出して、黒き月を脱出したんだとか。

どうしてH・A・L・O・システムを持ち出したのかに関しては、曰く“黒き月を破壊するほどの力を秘めた、人間のテンションとやらが気になった”んだそうだ。黒き月

を破壊したのはエンジェル隊ではないものの、黒き月が作りだした無人艦を破壊したのはエンジェル隊だ。そう考えれば、納得はいかないが理解はできる。

武装に関しては既存の紋章機のデータを参考に白き月の工業用プラントで製作したらしい。材料さえあれば作れるとか、そんなことはないんだが、黒き月の管理者であるノアならできるのかもしれないな。

本来はリーダーや情報管理、データ観測などに秀でた紋章機を作るはずだったらしいが、その延長で電子戦に強化された紋章機が出来上がったらしい。そこらへんは後で詳しくクレータ班長も含めて話を聴きたいところだ。

「それで、他に聴きたいことはあるのかしら？」

「では私から。どうしてタクトさんの部屋に寝泊まりする必要があるのでしょうか？」

その問いに対して、ノアは質問したミントを見つめ、ミントが視線を反らさないことが分かると話した。

「あんたはミント・ブラマンシュね。あんたはテレパスを持っているみたいだけど、私が考えていることがわからないのかしら？」

「——っ！ いえ、私の他にも疑問に思っただけじゃないのかもしれない……」

そう、と呟いて、ノアはミントから視線を外す。

ミントの様子が一瞬おかしかった気がするが、なにがあつたのだろうか。いや、今は

それよりもノアのことだ。もしオレの部屋に居座るとするなら、これからのエンジェル隊の指揮に影響が出る、という建て前と、オレ自身がいろいろと保たないという本音があつて否定したいところだ。これは死活問題にもなり得る。本当に頭が切れるなら、そのことを考え付かないわけがない。何か、大きな理由があるんだろう。

「そうね、じゃあみんなに分かるように説明してあげるわ。まずひとつめ。それは、人間の力の源。心を調査するためよ。タクトにはエンジェル隊の指揮官として、さまざまな情報が集まつてくるわ。それに思考は常に冷静。普段ふざけているように見えるのも、その裏ではいつも思考を巡らせていることは分かっているの。そんなタクトの傍にいれば、何か分かると思つたのよ。シヴァも信頼しているみたいだしね」

オレがいつになく高評価なのは、まあおいておいて。シヴァさまに信頼されているっていうのが、第三者から言われると嬉しいものだな。だが、シヴァさまを呼び捨てにしていることは許されているのだろうか。ノアの言を信じるにしても、ルフト先生からの情報をみるに、ノアが黒き月の管理者——おそらく月の聖母みたいな立場なんだろうが——であることは間違いないだろう。もしそうであるならば、シャトヤーンさまと同じ立場であつたということだ。それなら呼び捨てが許されているのもまあ理解はできる。シャトヤーンさまはちゃんとシヴァ“女皇陛下”と呼んでいるが。

それはそれとして、それでもまだオレの部屋で寝泊まりする理由には弱い。まだひと

つめだし、これからどんどん重要な理由というか情報が明かされるのかもしれないし。まだ分からないが、これだけが理由ならば、追いつくには問題ない。

「次にふたつめの理由なんだけれど。これはタクトがエンジェル隊の上に立つ者としての力量を認めて、タクトを知りたいと思ったからよ。光栄に思いなさい、タクト・マイヤーズ。私が認めた人間はあなたが二人目よ。ま、タクトが天使達のテンションを常に高く維持し、それを戦闘でぶつける。紋章機のH・A・L・O・システムに上手く活かし、そして黒き月を破壊することができた。これに私は魅了されたわ。タクトのことが知りたい。そう思ったのよ。それでタクトのことを知るなら、より傍にいればいいということで、タクトの部屋に邪魔することになったわけ。まああんたらに分かり易く言うと、私がタクトを研究したい。ということになるわ。これで分かったでしょう？ もちらんシヴァの許可ももらってるから、今更何を否定しようとも、覆ることはないのだけれど」

「なっ！」

ミント絶句。ちなみにオレも絶句。

その言い方だと、なんかオレに気があるみたいじゃないか。いや、そんなことがないのは分かってるさ。あれだろ、実験動物を見るかのような感じなんだろ。分かるさ。

でも、最初のころの傲慢な態度はどこかに霧散したみたいに、付き合やすくなつて

いる。もしオレの部屋に泊ることを容認したら、もつと付き合いやすくなるのだろうか。そうなるのであれば、エンジェルたちとも仲良く慣れるのであれば、オレはソファで寝るのもやぶさかではない。ノアが協力してくれるのならば、エンジェル隊のテンションも高く維持することも、少しは容易になるかもしれない。ギスギスした関係でいるよりはよっぽど楽だ。

しかし、今ので沈黙が落ちてしまったな。これは少々居心地が悪い。

「ヴァニラ。ちよつとお茶を淹れてくれないかな。オレはコーヒー。ミントは紅茶かな。ちとせは緑茶？ がいいだろう。ノアは何にする？」

「そうね、私も紅茶をもらおうかしら」

「だ、そうだ。ヴァニラも好きなの淹れていいよ」

「はい、わかりました」

ヴァニラが立ちあがる。ちとせは息苦しい空気が多少は和らいだことにホツと息をついていた。ミントはノアを見つめたまま微動だにしていない。納得がいかない、つて顔ではないみたいだけど、さつきからどうしたんだらうか。

「ミント。さつきから何か気になつていてもあるのかい？ 何やらノアのことをずっと見つめているけど……」

「い、いえ、なんでもありませんわ」

「そうかい？ ミントがそういうならいいけど。なにかあったら相談してくれよ。解決できないかもしれないけどさ、力にはなりたいたいと思う」

「その時はご相談させていただきますね。ご心配をおかけして申し訳ございません」

そうこうしているうちにヴァニラが戻ってきた。目の前にコーヒーを置かれる。ふと薫ってきたコーヒーの香りが染みわたる。一口飲むと、程よい酸味が舌を刺激してくれた。やっぱりヴァニラが淹れてくれるコーヒーは美味しいな。

ミントも紅茶を飲んで落ち付いたのだろうか。先程まで感じていた違和感は消えていた。やっぱり勘違いだったのだろうか。

ずっとミントのことを見つめていたのが気になったのか、ミントは閉じていた目を片方だけ開け、こちらを見返してくる。すると、ふつと微笑み、また紅茶に口を付けた。

今の笑みはなんだったのか分からないが、心からの笑みを向けてくれたのは分かった。これは本当にオレの勘違いだったのかもしれない。

「それで、私がタクトの部屋に泊ることの説明は終わったわけだけど、この話はもういいかしら？」

視線はオレに向いていたが、ミントに対して言っていることは分かった。ミントはそれに対して、ええ、とだけ答えた。

「そう。それじゃあタクト。私のことを案内してくれないかしら？ この艦内を見て回

りたいわ」

「了解。じゃあみんな。今日はこれで解散。ミントとヴァニラ、ちとせは各自自由に過ごしてくれ。もう何回かクロノ・ドライヴをすれば軌道ステーションに着くはずだ。それまでは自由にしてくれていいよ。軌道ステーションでは艦から降りて買物とかもできるから、必要ならブリッジで手続きをしておいてね。ノアはオレがブリッジから許可をもらうのを待ってから行こうか」

カッブは置いておいていいよ、後でオレが片付けるから。とヴァニラに声をかけて、みんなが司令官室を出るのを見送る。

ヴァニラとちとせは自分で片づけるつもりだったのか、頭を下げたから出て行った。ミントだけは何か言いたげにこちらを見ていたが、やがてドアの向こうに姿を消した。

「タクト、あんたは三人に好かれているみたいね。特にミント・ブラマンシュ。彼女の好意は大きいみたいね」

「そうかな？ 確かにみんなオレのことを嫌っているとは思わないけど。でも彼女たちに指示を出す者として、仲間として、そう思ってくれているのは嬉しい限りだよ。ミントの好意云々に関してはよくわからないけどね」

そういつて笑う。まあ実際に思っていることだし。彼女たちのテンションを高く保つためには少なくとも嫌われていたらできないことだしね。それにかわいい子きれい

な子に好かれるというのは嬉しいものだ。正直に言えば、もうちよつと仲良くなりたいたところなんだけどね。

ミントに関しては、テレパスで今まで苦労してきたみたいだし、そういった面に配慮するのは当然だ。そういったことから、普通の軍の人間よりは理解があるつもりだし、そういった意味で付き合いやすいんだろう、と思ってる。

「そうね。まあ気がついていないならそれでいいんだけど。それはいいけど、いつになつたら、ブリッジから許可をもらえるのかしら？」

「ああ、もうちよつとでレスターから変身がくると思うよ……つと、来たみたいだ。それじゃ、案内しますよ、お姫様」

「それでよろしい。早く行くわよ」

何に気がついていない、というのだろうか。ノアもあまり気にした風ではないし、ミントたちも何かを言っていたわけではないから、あんまり重要なことではないのかもしれないが。

さて、とりあえずはノアの艦内を案内することに専念しますか。最初に言っていたノアさま宣言もこうしてお姫様扱いしておけばいいだろう。今でこそ冗談だと分かるし。多分、場を和ませようとして失敗したんだろう。そこらへんはシヴァさまの知恵かな。

ま、まずは案内だ。さて、どこから案内しようか。

☆☆☆

「さて、ここで最後。銀河展望公園だよ」

「きれいなところね。艦内にクジラルームだとか公園だとかがあるのは、エンジン隊のテンションを高く保つたために必要な施設といったところかしら？」

「ははっ、まあそれだけじゃないけどね。でも仕事で疲れたときに、ここやクジラルームといったところに行くのと、リフレッシュできるのは間違いないだろうし。適度な休憩は作業効率を上昇させるんだ。ないよりはあった方がいいだろう？」

「余裕があるならね」

そういつて笑い合う。ノアともだいぶ打ち解けることができた気がする。このままエンジン隊のみんなとも仲良くしてくれればありがたいんだけどね。

「全艦に到達。只今、本艦はテオ星系、軌道ステーションクリニアに入港いたしました。四半刻後に昇降ハッチを解放します。それまでは所定の位置で待機してください。線り返します——」

アルモのアナウンスが響き渡った。

「おっと、結構な時間が経っていたみたいだね。それじゃオレはこれで。ブリッジに戻

らなくちゃならないからね。ノアもここから自由にしてくれていいよ。艦から降りるなら許可をもらってね。時間内に戻ってきてくれれば、どこに行っても大丈夫だから」

「わかったわ。案内、感謝するわよ、タクト」

ノアその言葉を聴いて、背を向ける。ノアの笑っている顔も見れたし、今日のところはこれでいいだろう。明日からもうまくいってくれるといいんだけどね。

しかし。

背を向け、歩きだしていたオレには、ノアが何かを呟いていることに気がつかなかった。

「どこまでできるのか、楽しみにしているわ。タクト……」